

- 1 . ネブカデネザル王が、全土に住むすべての諸民、諸国、諸国語の者たちに書き送る。
あなたがたに平安が豊かにあるように。
- 2 . いと高き神が私に行なわれたしるしと奇蹟とを知らせることは、私の喜びとするところである。
- 3 . そのしるしのなんと偉大なことよ。
その奇蹟のなんと力強いことよ。
その国は永遠にわたる国、その主権は代々限りなく続く。

- 4 . 私、ネブカデネザルが私の家で気楽にしており、私の宮殿で栄えていたとき、
- 5 . 私は一つの夢を見たが、それが私を恐れさせた。
私の寝床での様々な幻想と頭に浮かんだ幻が、私を脅かした。
- 6 . それで、私は命令を下し、バビロンの知者をことごとく私の前に連れて来させて、その夢の解き明かしをさせようとした。
- 7 . そこで、呪法師、呪文師、カルデヤ人、星占いたちが来たとき、
私は彼らにその夢を告げたが、彼らはその解き明かしを私に知らせることができなかった。
- 8 . しかし最後にダニエルが私の前に来た。
～ 彼の名は私の神の名にちなんでベルテシャツアルと呼ばれ、彼には聖なる神の霊があった。～
私はその夢を彼に告げた。
- 9 . 「呪法師の長ベルテシャツアル。
私は、聖なる神の霊があなたにあり、どんな秘密もあなたには難しくないことを知っている。
私の見た夢の幻はこうだ。
その解き明かしをしてもらいたい。
- 10 . 私の寝床で頭に浮かんだ幻、私の見た幻はこうだ。
見ると、地の中央に木があった。
それは非常に高かった。
- 11 . その木は生長して強くなり、その高さは天に届いて、地の果てのどこからもそれが見えた。
- 12 . 葉は美しく、実も豊かで、それにはすべてのものの食糧があった。
その下では野の獣がいこい、その枝には空の鳥が住み、すべての肉なるものはそれによって養われた。

- 13 . 私が見た幻、寝床で頭に浮かんだ幻の中に、見ると、ひとりの見張りの者、聖なる者が天から降りて来た。
- 14 . 彼は大声で叫んで、こう言った。
『その木を切り倒し、枝を切り払え。
その葉を振り落とし、実を投げ散らせ。
獣をその下から、鳥をその枝から追い払え。
- 15 . ただし、その根株を地に残し、これに鉄と青銅の鎖をかけて、
野の若草の中に置き、天の露にぬれさせて、地の草を獣と分け合うようにせよ。
- 16 . その心を、人間の心から変えて、獣の心をそれに与え、七つの時をその上に過ごさせよ。
- 17 . この宣言は見張りの者たちの布告によるもの、この決定は聖なる者たちの命令によるものだ。
それは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、
また人間の中の最もへりくだった者をその上に立てることを、生ける者が知るためである。』

- 18 . 私、ネブカデネザル王が見た夢とはこれだ。
ベルテシャツアルよ。
あなたはその解き明かしを述べよ。
私の国の知者たちはだれも、その解き明かしを私に知らせることができない。
しかし、あなたにはできる。
あなたには、聖なる神の霊があるからだ。」
- 19 . そのとき、ベルテシャツアルと呼ばれていたダニエルは、しばらくの間、驚きすくみ、おびえた。
王は話しかけて言った。
「ベルテシャツアル。
あなたはこの夢と解き明かしを恐れることはない。」
ベルテシャツアルは答えて言った。
「わが主よ。
どうか、この夢があなたを憎む者たちに当てはまり、
その解き明かしがあなたの敵に当てはまりますように。
- 20 . あなたがご覧になった木、すなわち、生長して強くなり、その高さは天に届いて、地のどこからも見え、
21 . その葉は美しく、実も豊かで、それにはすべてのものの食糧があり、
その下に野の獣が住み、その枝に空の鳥が宿った木、
22 . 王さま、その木はあなたです。
あなたは大きくなって強くなり、
あなたの偉大さは増し加わって天に達し、
あなたの主権は地の果てにまで及んでいます。
- 23 . しかし王は、ひとりの見張りの者、聖なる者が天から降りて来てこう言うのをご覧になりました。
『この木を切り倒して滅ぼせ。
ただし、その根株を地に残し、
これに鉄と青銅の鎖をかけて、
野の若草の中に置き、天の露にぬれさせて、
七つの時がその上を過ぎるまで野の獣と草を分け合うようにせよ。』
- 24 . 王さま。
その解き明かしは次のとおりです。
これは、いと高き方の宣言であって、わが主、王さまに起こることです。
- 25 . あなたは人間の中から追い出され、野の獣とともに住み、牛のように草を食べ、天の露にぬれます。
こうして、七つの時が過ぎ、あなたは、いと高き方が人間の国を支配し、
その国をみこころにかなう者にお与えになることを知るようになります。
- 26 . ただし、木の根株は残しておけと命じられていますから、
天が支配するということをおあなたが知るようになれば、あなたの国はあなたのために堅く立ちましょう。
- 27 . それゆえ、王さま、私の勧告を快く受け入れて、
正しい行ないによってあなたの罪を除き、貧しい者をあわれんであなたの咎を除いてください。
そうすれば、あなたの繁栄は長く続くでしょう。」

28 . このことがみな、ネブカデネザル王の身に起こった。

29 . 十二か月の後、彼がバビロンの王の宮殿の屋上を歩いていたとき、

30 . 王はこう言っていた。

「この大バビロンは、
私の権力によって、
王の家とするために、
また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。」

31 . このことばがまだ王の口にあるうちに、天から声があった。

「ネブカデネザル王。
あなたに告げる。
国はあなたから取り去られた。

32 . あなたは人間の中から追い出され、

野の獣とともに住み、
牛のように草を食べ、
こうして七つの時があなたの上を過ぎ、
遂に、あなたは、いと高き方が人間の国を支配し、
その国をみこころにかなう者にお与えになることを知るようになる。」

33 . このことばは、ただちにネブカデネザルの上に成就した。

彼は人間の中から追い出され、牛のように草を食べ、
そのからだは天の露にぬれて、ついに、彼の髪の毛は鷲の羽のようになり、爪は鳥の爪のようになった。

34 . その期間が終わったとき、

私、ネブカデネザルは目を上げて天を見た。
すると私に理性が戻って来た。
それで、私はいと高き方をほめたたえ、永遠に生きる方を賛美し、ほめたたえた。
その主権は永遠の主権。その国は代々限りなく続く。

35 . 地に住むものはみな、無きものとみなされる。

彼は、天の軍勢も、地に住むものも、みこころのままにあしらう。
御手を差し押えて、「あなたは何をされるのか。」と言う者もない。

36 . 私が理性を取り戻したとき、

私の王国の光栄のために、私の威光も輝きも私に戻って来た。
私の顧問も貴人たちも私を迎えたので、
私は王位を確立し、以前にもまして大いなる者となった。

37 . 今、私、ネブカデネザルは、天の王を賛美し、あがめ、ほめたたえる。

そのみわざはことごとく真実であり、その道は正義である。
また、高ぶって歩む者をへりくだった者とされる。

30. 「この大バビロンは、私の権力によって、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。」 27

ybxi @qtBi Vkl m tybē. Htyab/ hrājyDI atBr; lbB' ayhiad' al h]

権力 力 ʾyrdh; rqyliv

glorify, honor, majesty 荣誉, 宝, 價格, 光輝, 威光 preciousness, price, honour

Pi.Pf. build I great not

34. 私、ネブカデネザルは目を上げて天を見た。すると私に理性が戻って来た。(Heb.31)

bwty9 yl:[] y[DānW tlg nl ayhm.v.li ynyq;

rCndk Wbn9 hn'a

bwT Pi.Impf. 知識 Pi.Pf. !ymv. 天空

取り戻す, 返答する knowledge, power of knowing 持ち上げる

knowledge 2, reason 1, understanding 1

return 4, answer 2, return answer 1, restore 1

説教

ネブカデネザルはユダ王国を滅ぼしたバビロニア帝国の王です。

彼は新バビロニア帝国の創立者である父ナボポラッサルの後を継いで、BC.605年からBC.562年まで帝国を治めました。

彼は、BC.605年にエジプトのパロ・ネコ二世の軍をカルケミシュの戦いで破って

シリアとパレスチナを征服し（この時ダニエルも捕虜となって捕え移された）、

ユダのエルサレムを攻め落として、エラム（今のイラン）、さらにはエジプト全土にまで攻め上ってこれを支配下に治めます。

こうしてネブカデネザルの治世にバビロニアは最盛期を迎えます。

彼は帝国全土から連れて来た奴隷を使って次々に巨大な建造物を造り、バビロニアの首都バビロンは、瞬間に世界最大の都市となりました。

諸国の征服による利益と貿易を通して

世界中の富がバビロンに流れ込んでバビロンは繁栄を極め、ネブカデネザルはその富を都市を飾ることに費やしました。

「53のジググラト(聖塔)を持ち、

50万人の人口を抱え、

バビロン王国の首都に相応しく、

街の中央には90mの高さのバベルの塔が聳え、頂上には金で覆われた神殿が太陽の光で輝いていた。

宮殿には空中に青々と茂る木々が覆っていた...。」（ヘロドトス）といひます。

中でも「空中庭園」は有名で、世界七不思議の1つにもなっています。

この「空中庭園」というのは、ネブカデネザルがペルシアから王妃として迎えたアミティスのために造ったものです。

山間の高地で育ったアミティスはバビロンの平坦な平原に慣れることが出来ずに故郷を偲んでいるの見て、

ネブカドネザルは王妃のために故郷に似せた緑豊かな山をバビロンの町のど真ん中に造ってしまった、それが空中庭園でした。

それは、縦横125mの基壇の上に5段の階段状のテラスがあるピラミッド型の建物で、高さは105mにもなると考えられています。

庭園の各テラスには様々な植物が植えられ、鑑賞用植物だけでなく、野菜や香辛料なども植えられていました。

バビロニアは古くから塩分を含んだ土地で、植物が育ちにくい荒地であったため、

そこに突如出現した緑の山は「天と地の間に浮かんでいる」という伝説を生み出すほどの壮麗さでありました。(=それで「空中庭園」と呼ばれる)

これが世界七不思議と呼ばれる理由は、そのように人工的に平地に造られた山にどうやって水を最上部まで配給したのかという点です。近隣のユーフラテス川から汲み上げた水を使っていた事は間違いありませんが、給水システムについて詳しいことは判っていません。有力な説としては、大型の水車を各フロアに設けて上段のフロアへ汲み上げたとか、らせん水揚げ機を使ったなど考えられているが、定かではありません。

いずれにせよ、この時のネブカデネザルは、近隣諸国を制圧し、経済的に最高に恵まれ、世界最大の都市を建設して、自分のやりたい放題、やりたいことが何でもできるというほど、まさに栄華を極めてありました。

その象徴とも言える空中庭園で、ネブカデネザルは、バビロンの空前の繁栄ぶりを眺めながら思わずこう言います。

「この大バビロンは、私の権力によって、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。」(4:30)

29. 十二か月の後、彼がバビロンの王の宮殿の屋上を歩いていたとき、

30. 王はこう言っていた。

「この大バビロンは、
私の権力によって、
王の家とするために、
また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。」

実は、ここに至るまでの過程がありました。

4章1節から見ていくと、

まずネブカデネザルが夢一つを見ます。

それは、一本の大木が天に届くほど大きく成長し、

枝も美しく豊かに伸び、繁って、そこに野の獣が住み、空の鳥が巣を作って養われていたが、

いきなり天の御使いが現れて

「その木を切り倒し、枝を切り払え、根株だけを残して、これに鉄と青銅の鎖をかけ、

野の若草の中に置き、天の露に濡れさせて、地の草を獣と分け合うようにせよ。

その心を人間の心から変えて、獣の心をそれに与え、七つの時を過ぎさせよ。

それは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、

また人間の中の最もへりくだった者をその上に立てることを、生ける者が知るためである。」

つまり、繁栄して高慢になっているネブカデネザルを神さまが打ち砕き、

乞食同然どころか獣同然の惨めな生活を味わわせてへりくだらせ、

神さまが世界を支配しておられることを思い知らされるという警告でした。

この夢の意味をダニエルが説き明かし、ダニエルはネブカデネザルに高慢にならぬよう、罪を悔い改めて正しく歩むよう勧めます。

しかし、それから一年後のことでありました。

ネブカデネザルは、一年前に自分が見た夢による警告を無視して、傲慢にも、30節のように豪語したのです。

30. 王はこう言っていた。

「この大バビロンは、
私の権力によって、
王の家とするために、
また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。」

しかし、このことばがまだ王の口にあるうちに、天からこう声がありました。

31. このことばがまだ王の口にあるうちに、天から声があった。

「ネブカデネザル王。

あなたに告げる。

国はあなたから取り去られた。

32. あなたは人間の中から追い出され、

野の獣とともに住み、

牛のように草を食べ、

こうして七つの時があなたの上を過ぎ、

遂に、あなたは、いと高き方が人間の国を支配し、

その国をみこころにかなう者にお与えになることを知るようになる。」

そうしてそのみことばの通りに神のさばきがネブカデネザルに下されたのでした。

33. このことばは、ただちにネブカデネザルの上に成就した。

彼は人間の中から追い出され、牛のように草を食べ、

そのからだは天の露にぬれて、ついに、彼の髪の毛は鷲の羽のようになり、爪は鳥の爪のようになった。

戦争に負けて捕虜になったのか、

はたまた反逆やクーデターが起きて王宮から追い出されたのか具体的な事情はわかりませんが、

いずれにせよ、ネブカデネザルは完全に失権して、七年間もの長きにわたって野山での潜伏活動を強いられます。

野宿し、

食うに事欠いて、

野草を食べながら何とか食いつなぎ、

そうした獣同然の生活により、彼の髪の毛も爪も、獣のように変わり果ててしまった、というのでした。

どうしてこのようなさばきを受けたのでしょうか。

それは彼が自分に栄光を帰したからです。

自分の繁栄の原因と目的を自分に帰したからです。

神に栄光を帰さずに、自分に栄光を帰しました。

これまですべてが順調にうまくいっているものだから、高慢になって、あたかも自分が神のようになってしまったのです。

彼が神のさばきを受ける直接の原因になった30節の言葉を検証してみましょう。

これを見ると、まず、ネブカデネザルは、大バビロンを建てた功績者は自分だとして「私が建てた」と言いました。

「私、この私が建てたんだぞ!」と、わざわざ力を入れて、鼻息荒く強調しております。

しかも、「私の力、権力によって」と付け加えます。

自分の「力ある権力」強大な権力、

あるいは自分の優れた手腕・能力によってこれらの偉大なバビロンはできた、

つまり、これら偉大なバビロンは、自分の偉大さを映し出すものであり、自分の偉大さを証明する鏡だというのです。

このようなことは、私たちも身につまされることです。

自分が試験に合格した、良い点数を取った、出世した、活躍した、成功した、有名になった、家庭がうまくいっている、自分の豊かな繁栄ぶりは結局のところ自分の偉大さの結果であり、自分の優れた手腕や能力を証明するものであるということです。

そして、さらに、(原文によると)大バビロン建設の目的を二つ挙げておりますが、一つは、「王の家のため」であり、もう一つは「私の威光を輝かすため」と言うのです。

ネブカデネザルは、

これまでバビロニア帝国を、自分の王家のため、そしてさらに露骨には「私の威光を輝かすため」に建設してきたというのです。自分の栄光のためにこれまで頑張ってきたと言います。

だから、神さまのさばきを受けたのです。

結局、この言葉によりさばかれて、ネブカデネザルは没落します。

そもそもネブカデネザルに世界最高の繁栄をくださったのは誰でしょうか？

言うまでもなく、それは神さまです。

たとえ神さまを信じない異邦人のネブカデネザルであっても、

その繁栄を彼にもたらしてくださったのは、他にもないこの天地を造られた神さまなのです。

人が獲得したのではなく、神さまが恵みによってくださったのです。

それなのに、「私が建てた」とは何事でしょうか。

「**私**、この**私**が**建てたんだぞ!**」

「**私の力、能力、手腕によって!**」

彼がユダとエルサレムを滅ぼすことができたのも、

それは彼がユダヤ人よりも正しい人であったからではありません。

ユダヤ人があまりに悪く罪深かったので、

それで神さまが「こんな奴らが神の民とは証しにならぬ」と彼らを罰して滅ぼされたのです。

そして、

巨大なバビロニア帝国もその君主であるネブカデネザルも、実は単にユダを罰するために用いられた道具に過ぎませんでした。

つまり、「私が建てた」のではなく、「神さまが建ててくださった」のです。

また、「私の家のために、私の威光を輝かすために」バビロンを建てたというのも傲慢な話です。

神さまがバビロンを繁栄させてくださったのなら、

神さまに仕え、神の栄光のために奉仕すべきではないでしょうか。

それなのに、ネブカデネザルは、自分の家の繁栄と自分の栄光を世界にあらわすと言います。

どんなに彼が汗水流し血を流して王国を築き上げたとしても、それは全部自分のためです。

自分の栄光のためです。

自分の栄光を世界に表すためです。

自分が有名になり、自分の前に人々が平伏し、自分の名が崇められるためです。

別の言い方で言うならば、自分がこの世の神となるためです。

何をするかよりも何のためにということが最も肝心な所だと先週学びました。

何のために？

自分のためです。

ネブカデネザルは自分の栄光のために生きていた、

自分の名が崇められ、

すべてが自分の言いなりになる自分の王国を築くために、ネブカデネザルはこれまで戦ってきたというのです。

だから、神さまはネブカデネザルにさばきを下されました。

「お前は神ではない、

神ではなく、人に過ぎない、

その人であるということも、

真理を悟ることがなければ滅び失せる獣に過ぎない」ということを悟らせるために、

神さまは、ネブカデネザルからあらゆる繁栄を剥ぎ取り、獣同然の生活を味わわせられたのです。

あらゆる虚飾を剥ぎ取って、ひとりの、生身の、裸の人間として、神の前に立たせられたのでした。

17. それは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、

また人間の中の最もへりくだった者をその上に立てることを、生ける者が知るためである。

こういう時を七年過ぎて、初めてネブカデネザルはこの天地を造られた神を仰ぎます。

34. その期間が終わったとき、私、ネブカデネザルは目を上げて天を見た。

すると私に理性が戻って来た。

「私、ネブカデネザルは目を上げて天を見た。すると私に理性が戻って来た。」(34)

ネブカデネザルが目を上げて天を仰いだ時、彼に初めて理性が戻って来たのです。

つまり、それまでは理性が働きませんでした。

頭がおかしくなっていました。

自分の築き上げてきた繁栄に惑わされて理性を失っていたのです。

理性を取り戻したネブカデネザルは、今度は自分をほめたたえるのでなくして、神さまをほめたたえます。

天地を造られた神の主権こそが「永遠の主権。その国は代々限りなく続く。」と、神さまをほめたたえるのです。

それで、私はいと高き方をほめたたえ、永遠に生きる方を賛美し、ほめたたえた。

その主権は永遠の主権。

その国は代々限りなく続く。

35. 地に住むものはみな、無きものとみなされる。

彼は、天の軍勢も、地に住むものも、みこころのままにあしらう。

御手を差し押えて、「あなたは何をされるのか。」と言う者もない。

そして再び王位に復帰し、「以前にも増して大いなる者となった」のでした。

36．私が理性を取り戻したとき、私の王国の光栄のために、私の威光も輝きも私に戻って来た。

私の顧問も貴人たちも私を迎えたので、私は王位を確立し、以前にもまして大いなる者となった。

最後に、これらの事件を総括して、ネブカデネザルは告白します。

37．今、私、ネブカデネザルは、天の王を賛美し、あがめ、ほめたたえる。

そのみわざはことごとく真実であり、その道は正義である。

また、高ぶって歩む者をへりくだった者とされる。

私たちも同じではないでしょうか。

私たちはそれぞれ神さまの恵みを祝福を受けて生きています。

決して忘れてはならないは、どんな祝福も神さまが与えてくださるということです。

ネブカデネザルのようにそれを忘れると、ネブカデネザルのように呪われます。

没落します。

せっかくいただいた神さまのお恵みもすべて取り去られます。

すべての失うのです。

「私が建てた」と言っではなりません。

むしろ、神さまが建ててくださいました。

自分のこれまでの人生を祝福してくださいました。

これまでの仕事を祝福してくださいました。

家庭を祝福してくださいました。

経済的に豊かにお恵み下さいました。

神さまがすべての祝福を満たして下さったのです。

自分が持っているもので、神さまからいただかなかったものは一つもありません。

全部神さまからいただきました。

ただ恵みによって、いただきました。

すべては神さまの恵み、

それを認め、感謝して、神の栄光のために生きる、そこに理性ある人間の生き様があるのです。

34．その期間が終わったとき、私、ネブカデネザルは目を上げて天を見た。

すると私に理性が戻って来た。

それで、私はいと高き方をほめたたえ、永遠に生きる方を賛美し、ほめたたえた。

その主権は永遠の主権。

その国は代々限りなく続く。

ここに集うみなさんひとりひとりが、

どのような状況にあっても、目を天に上げ、神を仰いで、理性を回復することができますように、

そして、神さまが与えてくださる繁栄、祝福、恵みに感謝して、

神さまが下さったすべてのものを用いて、

手も足も財産もいのちも神のために用いて、神の栄光をあらわして生きていかれるよう祈ります。